シリーズ『会長だより：郷土の誇り』(2)牧之原の「諏訪原城跡（国）」

杉本豊久

１）城の概要：

大井川鐵道の出発点、新金谷の駅から車で牧之原台地に上がり、茶畑をしばらく行くと、諏訪原城跡に着く。受付前の駐車場に車を停め、親切なおじさんの案内で、茶畑を横目に見ながら進むと、真新しい薬医門を含む広大な城跡が見えてくる。昭和 50 年（1975）に国指定史跡となり、さらに平成 14 年（2002）に大手曲輪の一部が追加指定され、きれいに整備された。平成 29 年（2017）には「続日本１００名城」に認定されている。牧之原台地の北端に近い標高 212~220 メートルの台地に立地する戦国時末期の山城である。

元禄４年（1561）ごろ、武田信玄がこの付近に砦を築いたのが城の発端とされるが、天正元年（1573）信玄が死去すると、息子の武田勝頼が、遠江侵攻の拠点とするため、家臣の普請奉行馬場美濃守信春（信房）と、その補佐武田信豊に命じて築城した。《注 1》城内に諏訪大明神を祀ったことから、「諏訪原城」の名がついたといわれる。ここは大井川を境として、駿河から遠江に入る国境に位置し、交通・軍事上で重要な場所であったため、武田・徳川の双方が国盗りの拠点にした城だ。具体的には、大井川渡河地点の確保、徳川方の遠江の拠点であった掛川城の牽制、併せて高天神城（掛川市）攻略のための陣城（攻めの城：前線基地）として、また攻略後は、兵站（へいたん）基地《注 2》としての役割を担った。現在でも、大きな三日月堀と曲輪（くるわ）《注 3》がセットになった丸馬出（まるうまだし）《注 4》や横堀が良好な形で残されていて、平成２８年に二の曲輪馬出（にのくるわうまだし）に城門を復元している。

《注１》『甲陽軍艦』（万治２年（1659）版本）島田市博物館所蔵：武田氏の戦術・築城方法などが記された軍学書

《注２》兵站基地：戦闘部隊の後方にあって、人員・兵器・食料などの前送・補給として、また後方連絡線の確保にあたる活動機能を担う基地。

《注３》曲輪：土を突き固めて高く盛り上げた土塁や柵、堀などで囲まれた平坦な区域のことで、尾根や斜面を造成して作ることもある。

《注４》丸馬出：武田流築城術の特徴で、虎口（城や曲輪への出入り口）の前に設けられた三日月掘りと曲輪がセットになった空間。敵からの防御だけでなく、見方が出撃する場合の拠点にもなる。

２）城の歴史要約：

武田信玄がこの地に砦を築いたのを発端とし、武田勝頼が家臣馬場美濃守信春（信房）に命じて築城したこの山城は、天正３年（1575）に徳川家康によって攻め落とされ、牧之原城と改名された。その後、今川氏真や松平家忠らが城番となるが、天正９年（1581）に高天神城を家康が奪回し、翌年武田勝頼とその子信勝が田野（甲州市）で自害し、武田氏が滅亡すると、この城の必要性もなくなり、家康が関東に移ったこともあって、天正 18 年（1590）頃に廃城になった。

３）諏訪原城をめぐる攻防戦

最も激しかったのは、天正３年（1575）６月から８月にかけての攻防戦だ。５月の長篠の戦で、織田信長とともに武田勝頼に大打撃を与えた家康は、それまで武田氏の手に帰していた遠江の城の奪還を試みる。その際に狙いをつけたのが諏訪原城だ。長篠の敗戦直後で、諏訪原城の武田方の武将が手薄だと判断した家康は、６月に動き出す。まず、家康の家臣桜井松平与一郎忠正が亀甲曲輪を落とすが、城兵の反撃にあって、大給松平真乗が一時敗北する局面もあった。しかし８月２３日に、家康自身が本陣を城近くの日坂峠の九延寺に移し、総攻撃をかける。翌２４日に、城兵たちは小山城（吉田町）に敗走し、ついに城は徳川方の手に落ちる。家康は、松井忠次・牧野康成に命じ、城の守りに就かせた。この頃から「牧野城」あるいは「牧之原城」と呼ばれるようになった。

ここで興味深いのは、家康がこの城の城主に今川氏真を迎えたことだ。当時氏真は、信玄と家康に挟み撃ちにされる形で、小田原城の北条氏康を頼っていたのだが、その後を継いだ氏政が信玄と手を結んだため、小田原城を出て家康に頼ろうとしていた。そこで家康は、駿河攻略の前面に駿河の旧主である氏真を立てれば、事がスムーズに運ぶのではと考え、氏真の亡命を受け入れ、さらに牧之原城の城主にまでした、というのがどうやら真相である。ここに、家康のしたたかな側面が窺える。ところが、もともと武将としての力量の欠ける氏真に、早々と家康

も見切りをつけ、天正５年（1577）には城主としての地位を解任している。

４）「諏訪原城（牧之原城)」の４つの特徴：

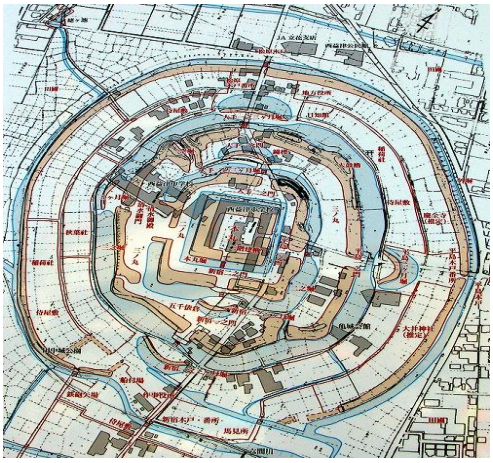
この城には４つの際立った特徴がある。その一つは、この城が武田流築城術の典型であるということだ。敵の攻撃に備えて作られた三日月堀と曲輪（平坦地）がセットになった巨大な丸馬出（まるうまだし）と横堀が、城の要の本曲輪を守るように幾つも設けられている。ただし、近年の発掘調査により、現在の堀や曲輪は徳川氏によってかなり改修されていた可能性があることが分かっている。第二の特徴は、この城が自然の地形（大井川）に守られた後ろ堅固な城であることだ。大手（表口）側は平坦だが、本曲輪の東側は断崖絶壁で、当時は城の眼下を大井川が流れていて、自然の地形に守られていたのだ。第三の特徴は、城全体の形状にある。本曲輪を扇の要（かなめ）として、幾つもの曲輪が扇状に広がっているため「扇城」とも呼ばれる。まさに「縄張り」（城設計）の傑作といえる。そして第四の特徴は、街道と密接に結びついた城であるということだ。東西の都を繋ぐ「東海道」が城域内を通過しており、東西交通の要衝の地に築かれた城でもある。

５）円形城「田中城」（下図左側）と扇城（右）の共通点：馬場美濃守信房という男

この城を作った馬場美濃守信房という武将は、武田信虎・信玄・勝頼三代に仕えた歴戦の重臣で、藤枝の田中城も手掛けている。今川氏の支城であった藤枝の徳之一色城を開城させた後、信玄が信房に命じて縄張りをさせ、全く新しい構想で新たな城を築き、田中城と命名したことが、『甲陽軍艦』の元亀元年（1570）正月の記事に記されている。

しかも注目すべきは、駿河にある武田氏の城の中で、円形の特徴を持つ城のほとんどがこの馬場信房の縄張だということである。近世軍学者の表現に、城の縄張の形態として、「円形の得、角形の損」という言い方がある。つまり、「城はできるだけ丸くした方が守りやすい」というわけである。そして、武田氏はこの理論を忠実に実践した縄張の城をたくさん作っており、田中城はその典型だということになる。どうやら、武田式築城法の特徴である円形の城と馬場信房とは切っても切れない関係にあるようだ。そして、田中城ほどに真ん丸ではないが、空から見ると、円形の一部のように見えるのが実は諏訪原城でもあるのだ。「扇城」ともいわれ、ちょうど扇の要にあたる部分に本丸櫓台があり、全体が扇を広げたような形をしており、自然の山を利用した縄張でこのような形にはなったが、

この種の地形の制約がなければ田中城のように丸くなっていたと思われなくもない。



また、諏訪原城をはじめとする武田式築城法の中に、「円形の得」を部分的に実践している箇所がみられることも興味深い。城の出入り口である「虎口（こぐち)」を守るための工夫としての「丸馬出（まるうまだし)」がそれであり、堀そのものを丸く作っている三日月堀がいくつかの城、深沢城・興国寺城・丸子城・小山城・小長井城などに見られる。これらの城に共通しているのは、いずれも武田氏の手が加えられる点である。

５）武田式築城を利用した家康

天正３年の長篠合戦を契機に、二俣城・諏訪原城・犬居城など、武田方の城を次々と落城または開城させ奪取したことにより、徳川の城は大きく変化していく。すなわち、武田氏の持つ築城術を巧みに取り入れ、より強固な防御構造を持つ城を築き上げるようになる。例えば、天正３年６～８月にかけて諏訪原城を攻めた家康は、８月２３日に落城に追い込み、翌日には入城する。光明城を落城させた後、主力部隊を諏訪原城に結集させ、城の名を「牧之原城」と改称し、松平家忠に命じ、改修工事を実施する。『家忠日記』によれば、天正６年３月から「番普請」、「堀普請」、「市場普請」、「塀普請」、「門普請」などを繰り返し、武田氏が多用した巨大な横堀（空堀）や丸馬出を重視する、より強固な城の改修を実施していたことが、発掘調査により明らかになっている。(2023.2.12)